

一

「こんにちは」「你好」という文字が並んでいるとします。「こ」「ん」「に」「ち」「は」および「你」「好」のそれぞれが一つの文字であることに異議を唱える人はまずいないでしょう。そして「你」と「好」をそれぞれ「イ」「尔」「ㄱ」「ㄴ」という要素に分けることにも直感的に同意できるはずです。

このような文字の単位について、西田龍雄(1986)¹⁾には次のようにあります(取意)。

①文字の最小単位を字素とよぶ。1字素よりなるものを単体字、2字素以上より構成されるものを合体字と呼ぶ。

②最小の意味単位を表わす字素連続を重要な単位として認める。

①によると、「こ」「ん」「に」「ち」「は」は文字の最小単位で1字素よりなる単体字、「你」「好」はそれぞれ2字素よりなる合体字ということになります。次に②ですが、西田(1986)は最小の意味単位に相当する単位名は提出しておりません。そこでこのような単位を「表意字素群」と呼ぶことにします。「群」といっても「山」「川」のように1字素よりなるものもありますから、単に「表意字素」とする場合もあることを述べておきます。

以下、字素、表意字素群という用語を利用し文字の単位について考えてみます。

二

さて、「ば」や「ㄹ」はそれぞれ1字素とすべきでしょうか、それとも「は」と「ㄹ」および「は」と「ㄹ」の2字素とすべきでしょうか。そもそも字素とは何でしょうか。西田(1986;p.241)によれば「どのような文字においても、最小単位はかなりはっきりしている。たとえば、ラテン文字では、a,b,c,...の26文字がそれであり、漢字では、部首を最小単位とみてよい。」とあります。字素の定義はいまひとつはっきりしません。単体字になりえるものを文字の最小単位すなわち字素としておられるようです。そうすると、「ㄹ」や「ㄹ」は文字の一部として固定されており単体字にはなりえないわけですから字素とは言えないということになります。ところで、単体字とはなりえないと言えば漢字の部首も同様です。「你」の人偏「亻」は「人」であり1字素であるということなのでしょうが、それは歴史を遡った話であり現時点では字形が異なっており単独では使用されません。さんずい「冫」に至っては「水」とは字形においてかけ離れております。どうも字素という単位の範囲をもう少し広げてもよさそうです。そこで、「意味や音に体系的に対応する最小の文字構成要素を字素とする」と定義することにします。「亻」や「冫」はそれぞれ意味の上で人や水に関連することを示すから単独で使用されなくとも字素です。また「ㄹ」や「ㄹ」はそれぞれ濁音や半濁音であることを示すからやはり字素です。なお、「お」の点「ゝ」は体系的に意味や音に対応しているわけではないから字素ではないということになります。

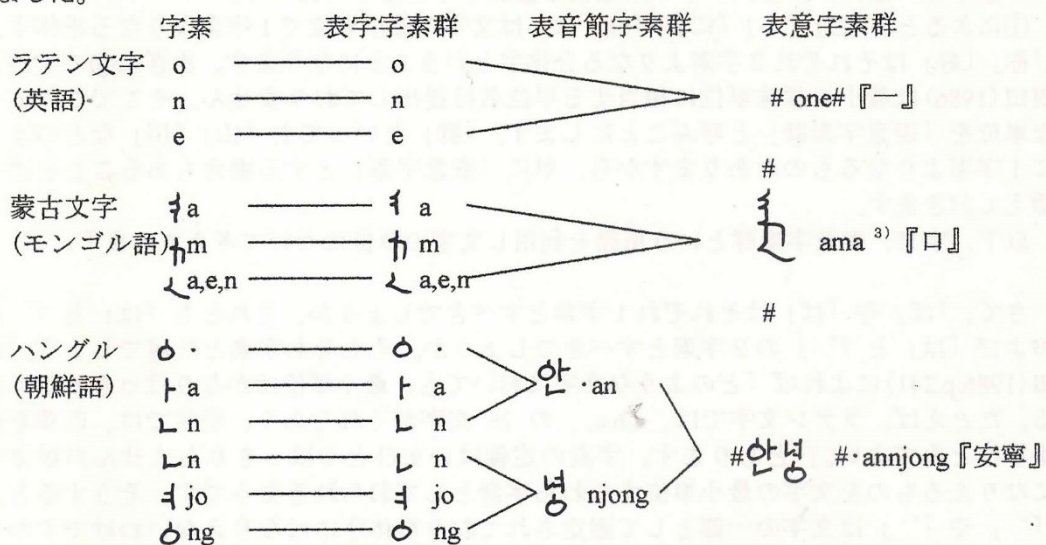
三

つぎに問題となるのは字素と表意字素群の間にどのような単位を設定するかということです。西田(1986;p.245)はハングルの **안**・an、**녕** njong などを表意字素群として扱います。しかしこれは「ひらがな」の一字一字を表意字素群とするようなものであり適当

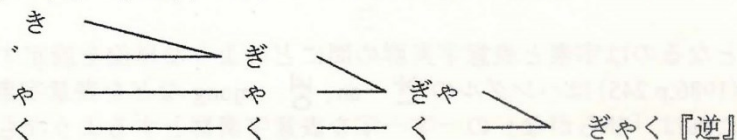
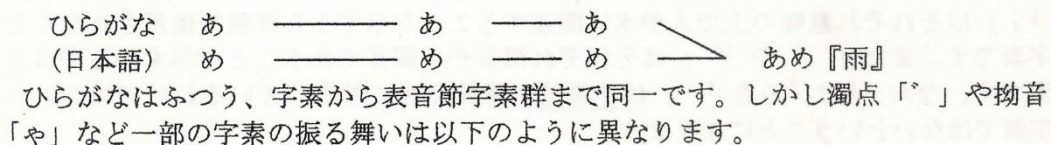
ではありません²⁾。字素と表意字素群の間に在って音節を示すものとした方がよいでしょう。これを「表音節字素群」と呼ぶことにします。

字素と表音節字素群の間にある単位として、一つの文字を表す単位を設定すると便利です。これを「表字字素群」と呼ぶことにします。ラテン文字は字素がそのまま表字字素となります。仮名文字はふつう字素が表字字素でもあり表音節字素でもあります。もっとも、「ば」や「ぱ」のように2字素で1表字字素群とした方がよいものもあるので注意が必要です。この表字字素群という単位ですが、これは文字一般にわたって共通の定義を与えることは難しく、それぞれの文字組織（ラテン文字、ひらがな、漢字、ハングルなど）の事情に応じて合理的に定めるしかないだろうと考えております。

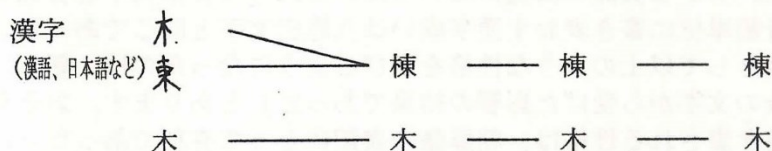
下にさまざまな文字組織につき、字素から表意字素群までを並べその関係を概観してみました。



ラテン文字や蒙古文字は字素が直接表意字素群をつくります。ハングルの場合、字素は先ず表音節字素群にまとめられ、次いで表意字素群にまとめられます。なお、三者とも表意字素群どうしはスペース#で区切られます。蒙古文字の場合、一つの表意字素群は連書され、字素群のまとまりはさらに明確にしめされます。これはラテン文字の筆記体も同様です。



字素の「ㇰ」や「ゃ」のうち、いずれを表字字素とするか、すなわち表字字素群をどのように決定するかということについて一般原則を立てることは難しいと感じております。おそらくはそれぞれの文字組織に応じて決定すべきものなのでしょう。「ㇰ」と「ゃ」のばあい、他の字素との位置関係が縦書き横書きでどのように変化するか又変化しないかをみると、「ㇰ」は他の字素の右上の固定されていますが、「ゃ」は位置が変わり独立した単位と認めることができます。このような点から「ゃ」を表字字素とするわけです。



漢字の特徴は字素もしくは表字字素群が表意字素群となるところにあります。漢字が表意文字もしくは表語文字⁴⁾と言われゆえんです。なお、ひらがなと漢字には表意字素群を明示するスペース # はありません。漢字から作られた「ひらがな」は、漢字の性質の一部を引き継いでいるわけです。

四

さて、漢字の特徴は字素もしくは表字字素群がそのまま表意字素群となるということにありました。このような文字であるためには何が必要かといいますと、これは当たり前のことですが、字素の数が多くなければなりません。字素の数が多くなればなるほど、最小意味単位(形態素や語)との結びつきはより具体的・個別的になっていきますし、逆に字素数が少なくなるにしたがい、最小意味単位との結びつきは希薄になり、ついには音のみを表すようになります。漢字などの表意文字とラテン文字などのいわゆる表音文字との本質的な違いは実に字素数の多寡にあるといえます。漢字は表意文字であるといわれますがそれは、山が山であり川が川であるように来源が過去の象形文字であり文字そのものが外界の観念と結びついているということではなく、字素数が多い故に、つねに最小意味単位と具体的・個別的に結びつき、そのことにより、字素もしくは表字字素群が音と意味を獲得し、それが社会習慣として実際の文字使用において強制力を持つようになるということにあると考えます。文字の歴史を遡った字源はどうであったかということから離れ、それぞれの時代の中で或る語を表記する文字として使用され一定の意味と結びつき表意文字として機能しているのであります。極端なことを言いますと「山」が「流れる川」を表す語と結びつきその意味と音を獲得しても表意文字であることに変わりはありません。

以上を要するに、字素数の多寡を基準にして文字組織を眺めると、ラテン文字やハングルのような字素数が少ない文字組織は表音文字と呼ばれ、漢字や西夏文字のように字素数が多い文字組織は表意文字と呼ばれるわけです。その中間には表音性と表意性が様々な比率で混在する文字組織があるはずで。

なお、字素から表意字素群に至るまでのあいだに幾つかの単位を設定することができるわけですが、それらの単位には関係する文字組織の伝統を引きずっている部分があり、それと表記される言語からの要請との間にどのような不都合があるか又ないかというよ

うな点も文字研究のおもしろさでしょう。

注

1) 西田龍雄「言葉と文字」(『言語学を学ぶ人のために』世界思想社、1986年所収)

2) 姜信沆『ハングルの成立と歴史』(東京:大修館書店、1993年、42頁)によると「文字としての性格は、ウイグル文字系蒙古文字及びチベット文字系八思巴文字と同じ音素文字(単音文字)であった。しかし実際の表記においては、これらの音素文字を音節を単位として書き表して、音節単位に書き表わす漢字或いは八思巴文字と同じであった。訓民正音(ハングル)が文字として以上のような性格を帯びるようになったのは、新しい文字を作る頃の、近隣民族の文字から受けた影響の結果であった」とあります。おそらくハングルが音節単位で書き表される性格は、朝鮮語の表記にとって有利であったというような内部から起こった要請ではなく漢語などの影響によるものでしょう。

3) 蒙古文字は語頭、語中、語末という位置の違いにより字形が異なります。それで、ㄱは語末において a, e, n の三つの音に対応する可能性を持ちます。しかしながら、蒙古語では二重子音が許されず又母音調和という原則もあるので、am--と続いたばあい、amn や ame は排除され ama とのみ読むことになります。

4) 河野六郎『文字論』(東京:三省堂、1994年、11頁。もと『岩波講座 日本語8(文字)』岩波書店、1977年)によると「漢字全般を通じて言えることは、その一字一字が本来中国語の一語一語を示すということであって、その意味では表意文字というよりも表語文字というべきである」とあります。拙稿では表意文字と表語文字を区別せずにもちいました。表音文字、表意文字、表語文字については稿を改めて述べるつもりです。